The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Interface humanities 06
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13191
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

出来事のデザイン

久保田徹・清水良介・花村周寛・本間直樹

プロセスとしてのデザイン

デザインとは通常見た目や形を作ることが目的だと捉えられがちである。だがデザインとは構想から実現に到るまでの一連のプロセスであり、そこに関わってくるのは形として表現されるものだけに留まらない。つまり、具体的に手に触れることのできるモノのあり方を一つずつ決定しながら、同時にそれらを通じて人と人との関わり方を決めること、すなわち関係性のデザインが目指される。例えば、ウェブサイトや冊子などのデザインや、屋内や屋外の空間のデザインにおいても、そのモノを媒体にどのような人と人との関わりが生まれるのかということを構想することこそ、見かけの意匠よりも本質的なデザイン行為であると言える。

デザインとはそのプロセスにおいて幾多の可能性の中から一つ一つ選択し決定していくという行為の積み重ねである。そのプロセスにおいて何かを選ぶこと、決めることは、その他の可能性を切り捨てることにほかならない。その意味でデザインは実験的行為という側面から検討されるべきである。つまりそこで決定され選ばれたものが何をもたらしたのか、また何が不足していたのかを幾多の切り捨てられた可能性とともに吟味し直すこと。そして次の製作へフィードバックするためのモニタリングが重要である。

ワークショップやイベントを企画・運営することも人と人との新たな関係性を生み出すという意味でデザインと呼ぶことも出来る。誰をターゲットにどのような媒体を用いるのか。どうやって人材を確保し、どんな役割を与え、ポジションを組むのか。どのように場所を設定し、スケジュールを組むのか。そうして一つ一つ決定していくことがどのような関係性の構築につながるのかを構想して実現させていくことはデザインに他ならない。例えば、研究教育の場である大学のキャンパスそのものを社会実験する場として見直すことも出来る。キャンパスは学部や学生教職員の区別なく行き交う場であり、時には地域住民も関係する場として捉えるとまさに生活環境であり、そうした環境の情報を大勢が共有できるカタチへと変換する。そしてガイドブックなどのようにまとめられた商品として流通させることで、それを読む人々が、キャンパスの中の様々な場との新しい関係性を再発見できる可能性を開くことも考えられる。

こうした一連のプロセスは出来事のデザインと言うことができ、そこでなされたことがその場で閉じてしまわず、言葉の壁、時の壁、場所の壁を越えて広く社会の中で評価され研究される必要があるだろう。

コミュニケーションデザインと研究教育システムの課題

先に述べたように、出来事に内在する事務的な手続きも含めた活動をデザインという枠組みの中に取り込んで考えてみると、果たしてその評価はどのように成されればよいのだろうか。あるいは人と人、人とものといった多様な局面における出来事のデザインに対する評価軸を、どのようなかたちで持ち得るべきなのだろうか。まず出来事を評価するにあたっては、そのドキュメンテーションが不可欠であろう。何がどのように執り行われたのか、どのような場面が円滑なコミュニケーションを生んだのか。そういったプロセスや状況を他者に伝えるための手段としては、映像や音声など時間軸を記録するメディアの活用が思い浮かぶ。映像に関して言えば、ビデオカメラがあれば誰にでも手軽に記録し再生することができ、活動プロセスを呑み込みやすい情報として見る者に紹介できる。しかし一方で、記録した出来事から評価してもらいたい要素を正確に抜き出す作業、つまり映像によるドキュメンテーションの編集方法については未だすべての人に開かれた領域だとは言えない。そもそも出来事を創造する当の実践者にとって、客観的なドキュメンテーションは非常

に困難な課題でもある。このような現状を踏まえながら、研究者や組織におけるドキュメンテーション・スキルの必要性に目を向け、ドキュメンテーションの実践者と研究者が共同研究といった形で実験を重ねてゆくことが重要であろう。そして、それらを含めた出来事の総体をコミュニケーションデザインという観点で捉えながら、例えば評価の枠組みを考えるべきではないだろうか。また昨今では、アカデミズムにおいて体験的に現場を理解し創造できる人材が求められる傾向にあるが、そういった実践者が現場体験の中で培ったノウハウを研究者と共有し、互いに対等に向かい合うための制度的な支えの設定も不可欠である。

コミュニケーションデザインとは関係性の創出である。そこには場の設えや情報を伝え共有するための方法とその構想から実施に到るまで、多元的な実践と研究の要素に満ちている。今後、出来事を通じて社会と濃密な関係を築いてゆくためにも、大学における新しい価値創出に向けたダイナミックな挑戦が求められている。

久保田徹（くぼた・てつ）

（株）生活環境研究所、早稲田大学メディアネットワークセンター非常勤講師を経て、2005年より大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師。専門はメディアデザイン。映像を介したドキュメントやアーカイブの利活用に関する研究、映像音響等のコンテンツ制作を行う。またNPO remo［記録と表現とメディアのための組織］（http://www.remo.or.jp/）、NPO recip［地域文化に関する情報とプロジェクト］などでも各種メディア実践を行っている。

清水良介（しみず・りょうすけ）

2002年、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」メディアスタッフを経て、2005年より、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任助手を務める。専門は情報デザイン。また、デザイングループ、inter-（http://intr.info/）で様々なデザイン活動も行っている。

花村周寛（はなむら・ちかひろ）

WIN Landscape planning & design、京都造形芸術大学非常勤講師を経て、大阪大学コミュニケションデザイン・センター特任教員を務める。専門はランドスケープ・デザイン。都市空間を中心に、人と人がコミュニケーションを図る場と風景について研究と実践を行う。
http:// www.doblog.com/weblog/myblog/50175

本間直樹（ほんま・なおき）

1998年に大阪大学大学院文学研究科博士課程を経た後、同研究科哲学講座助手として臨床哲学の創設に関わり、哲学的対話の方法論と実践、コミュニケーション理論について研究する。2000年講師。05年より同講座講師を兼任しながら、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター講師を務める。また、同年より、Café Philoを創設し、哲学カフェや哲学ワークショップなどの活動を通じて、さまざまな人々のあいだでの哲学的対話の支援を行う。

kavcaap2005「HIV／エイズ未来のドキュメント」
2005年6月30日–7月3日 神戸アートビレッジセンターにて。
展示デザインをCSCDのスタッフが手がけた。
撮影：CSCD

コミュニケーション支援技術について

西田正吾

私の研究室では、ヒューマンインタフェースの研究をやっており、具体的にはメディア技術、ヒューマンコミュニケーション技術、インターネット技術の三つのグループに分かれて、次世代ヒューマンインタフェース構築のための要素技術の創出とその適用可能性の検討を行っている。

ここでは、このうちコミュニケーション支援に関わる技術について、研究の発想の原点をご紹介したい。私が、最初にコミュニケーションに興味をもったのは、まだ企業の研究所にいたころで、設計の「意図」の伝達に関してであった。具体的な問題意識は、「設計においては、ハードの場合には設計図があれば同じものを再生産できるし、ソフトの場合にはプログラムコードが残っていれば動かすことができるが、ハードであれ、ソフトであれ、オリジナル設計者以外の技術者が設計変更して改修するのは容易ではない。どうして難しいのか?支援するためには何をすればよいか?」ということである。特に、大規模ソフトウェアについては、改修時に不具合が起こり、社会問題につながるケースも実際に起こっている。そこで、実際に大規模ソフトウェアを開発しているプロジェクトの関係者や開発者にインタビューを行うことにより、「設計の背景や設計者の意図、つまりどのようなコンセプトで設計をしたかを知ることが重要である」「設計されたものがどのように動くかではなく、どうしてそのような設計をしたかがわかることが重要である」ことなどが明らかになった。つまり、従来のソフトウエア仕様書は、フローチャート的にどう動くか（How question）の記述が中心であったが、どうしてそのような設計になっているか（Why question）を理解することが重要であるというわけである。そこで、これらの点を考慮した設計意図表象のためのツール開発に取り組んだ。

次に、興味を持ったのは、自分と他者との間の「概念の相違」「理解の相違」である。種々の概念や物事に対する理解は人により異なっているが、通常はなかなか気がつかない。ところが、ある話題について二人で対話をしていて「あなたが言ってるAは、私が言っているBと同じことを意味しているのだ」と気がついたり、他人同士が対話しているのをそばで聞いていて「Xさんの使うAという言葉は、Yさんの言うAとは違っているんですよ」という指摘がされることなどがよく観察される。このようなコミュニケーション過程における概念相違の検出を計算機でやれないかということで、限定された条件下ではあるが、その手法の開発に取り組んだ。工学的には、会社の合併に伴うデータベースの統合の際のシンボルの使い方の相違検出などに

NTM Agent（ネットオークションテキストマイニングエージェント）
担当：土方嘉徳助手

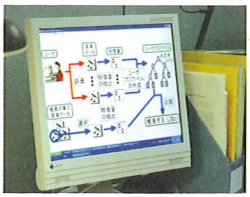
拡張現実感技術（景観ミュレーション）
担当：加藤博一助教授

適用できる可能性がある。

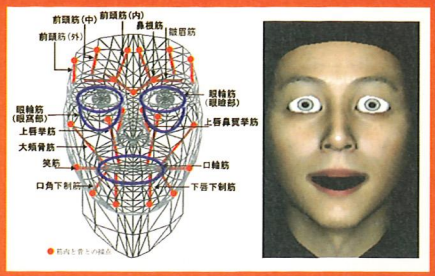
さらに、安心・安全に関わる災害時のコミュニケーション支援方式の研究において、「状況に応じて誰にコンタクトすべきかを支援する機能の実現」「時々刻々変化する状況の中で、意図と状況の乖離を表象するインタフェースの実現」「災害発生時に大量に発生する情報の中から、必要なものを選択できる情報フィルタリング機能の実現」などに取り組んだ。これらの研究の問題意識や発想としては、最初の「コンタクト先の支援」においては、Webなどから大量に情報が得られる今の時代においては、自分で情報を集めてそれを利用するよりも、「あることを知っている人」を知っており、問題が起こったときには「その人」に聞くことができるヒューマンネットワークを構築するほうが重要であるという事実（というか、私の信念）に基づいている。また、二番目の「意図と状況の乖離」も、研究室において学生と打合せをしてときに、お互いに研究の方向性について理解したつもりでいても、その理解が異なっており、一ヶ月後に次の打合せで会って報告を受けて初めて「そんな風に解釈していたんだ」と気が付くケースが多々みられたことなどに基づいている。

私自身は、このように従来より「意図」「概念相違」「理解」「意図と状況の乖離」などに注目してコミュニケーション支援の新機能の創出に取り組んできた。この四月より大阪大学にコミュニケーションデザイン・センター（CSCD）というコミュニケーションそのものの教育研究に取り組む組織ができたこともあり、今後は、CSCDと連携して、社会連携や社学連携のためのコミュニケーション支援技術の研究にチャレンジしていきたいと考えている。

西田正吾（にしだ・しょうご）
一九五二年生まれ。東京大学大学院工学系研究科（電気工学）修士課程修了。三菱電機（株）中央研究所グループマネージャー、MIT メディアラボ客員研究員などを経て、現在、大阪大学大学院基礎工学研究科教授。システム技術、ヒューマンインタフェース技術、メディア技術の研究に従事。ヒューマンインタフェース学会論文賞、電気学会業績賞、同論文賞、同著作賞等受賞。IEEE Fellow。著書は、「ヒューマン・コンピュータ交流技術」（オーム社、共著）、「メディア工学」（朝倉書店）、「情報メディア工学」（オーム社、共著）など。工学博士。



研究室の様子
（2005年6月3日、オープンラボにて）



感情伝達型アフェクティブインタフェース
担当：伊藤京子助手（現CSCD助手、基礎工兼務）

思い出コミュニケーション
担当：仲谷美江特任研究員（現CSCD特任助教授）

「イメ日」ワークショップの実験報告
―ディスカッション・ペーパー、インスタレーション

伊藤 遊

筆者が関わってきた当COE「イメージとしての〈日本〉」―通称「イメ日」―研究プロジェクトにおいては、研究内容の充実と同じくらいに、研究する場をいかにつくっていくか、ということの実験の努力が常に続けられてきた。

過去三回が開催された「若手研究者交流ワークショップ（WS）」は、「ディスカッション・ペーパー（DP）」方式を導入している点を大きな特徴とするイベントである。

この方式における最大の利点は、「発表者」の書いたDPを参加者にあらかじめ読んできてもらうことで、WS当日、議論に多くの時間を割けるということだ。

DPは、議論のためのペーパーである。誤解を覚悟で言えば、ペーパーの作者は言わば〝ネタ提供者〟。ゆえに、参加者同士の関係性は、しばしば通常の学会発表でみられるような「一人の発表者対（ある一人の）聴衆」という単線的かつ並列的なものではなく、その場にいる全員がDPを素材に有機的議論を展開させ得る「対等なディスカッサント」ということになる。

もっとも、DPは、一回のイベントのための単なる〝ネタ〟に終わるものではない。二〇〇三年度のWSでは、議論のフォローをどうしていくか、というモデルづくりの実験も行った。

そもそもDPというのは、いわゆる「論文」のように完成されたものではないというのが前提となっている。ペーパーの筆者には、WS当日の議論をもとにリライトしてもらい、当日のコメンテーターがそれにコメントを付ける。

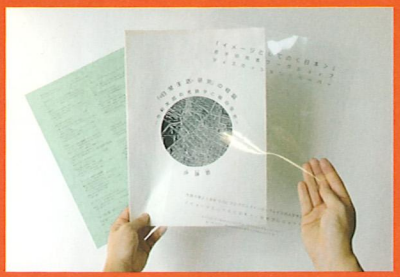
そして、そのリライターには、当WSで議論が行われたという〝しるし〟として、一枚の「表紙」を配布した。「表紙」が付けられたDPは、さらに別の場所でもDPとして議論されていく……ということが繰り返される。

重要なのは、DPが議論され書き換えられていく度に、どのような場でどのような箇所がどのように議論されたかという「議論の履歴」も（更新されながら）付されていくという点だ。DPの読者は、この「履歴」を読むことで、これまでの議論を参照しながら、はなしを展開させることが可能になるだろう。

もちろん、議論がある程度熟してきたと思ったら、いわゆる通常の「論文」として、学会誌などに投稿してもらって構わない。ただし、「論文」になってしまったからと言って、議論の〝旅〟は終わったわけではない。それはまた、DPという形で議論され、さらに変化していく可能性を永遠に持ち続けるのである。

ここには、「正しいコミュニケーションの技術」が、あらかじめ持っているある確固とした考えを他者に十全に伝えることとは限らない、という前提がある。

若手研究者交流WSの様子。発表者のDPをもとに、コメンテーターや参加者が議論をふくらませていく。机を取払い、椅子を輪にした会場設計は、このWSにおいては、単純だが効果的な「コミュニケーション・システム」である。



透明フィルムの「表紙」と、WS概要・DPの理念などが書かれた「裏表紙」に、自分のペーパーを挟んで綴じる。間のペーパーは、書き換えられたりするたびに、差し替えられたり、あるいは単純に古いバージョンのものと一緒に綴じられたりする。DPが、名刺のように手渡せるアナログメディアである点は実は重要。

私たちはWSというものを、自分たちが変わっていくあるいは変えていく現場として構成してきた。

モナシュ大（オーストラリア）との共催で開かれた国際WSにおける「インスタレーション」を使った共同発表でも、私たちはその観点に立っていた。

メディアラボとの討論を踏まえて作成したこの「インスタレーション」は、3×3mの模造紙に、「日本のポピュラーカルチャーのグローバリゼーション」というテーマに沿って書かれた、共同発表者五人のペーパーのキーワード（例えば、「アニメ」や「著作権」や「反日」といった）が並べられたもの。各発表者は文字通りこの「インスタレーション」の中に入り、キーワードをカラーペンでつなぎながら、そのつなげ方を解説する形で自らの議論を展開させた。五人の発表が終わった時点で、バラバラに見えた五つの議論とキーワード同士が有機的につながっていることがわかる、という仕掛けだ。

そこでは、まずもって、言語の異なる人たちと議論するためのコミュニケーションツールとして、ビジュアルの力、身体の力を借りようということがあったのだが、この装置のさらに重要な機能は、オーディエンスもこのインスタレーションの中に入って、キーワードとキーワードを自分なりの説明を付けてつなげなおしたり、足りないキーワードを付け足したりできるという未完成性にある。その際、これが身体性を取り込んだアナログ装置である点は重要だったと思う。一方で、同様の書き込みはA4用紙のアンケートにおいても行われ、その結果はウェブ上で公開・展開中である（http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/imenichi/monash/）。

ここでの私たちの目論見は、書き加えられ展開していく文字とキーワード同士を結ぶラインの修正と増殖のあり方が、ポップカルチャーを介して展開している「イメージとしての〈日本〉」そのものをビジュアル的に表現するだろうということであった。

「イメージ」とは、様々なレベルの出会いによって化学的な反応を起こし、変容・増殖していくものであるが、この「インスタレーション」方式では言わば、研究対象の動態を、研究現場のコミュニケーションツールそのものとして展開してみたわけである。そこには、「ポピュラーカルチャー」を「生きる」／「研究する」主体の不可分性という感覚の共有があるように思う。

もちろん、すべてのWSが、目論見通りというわけではない。しかしながら、目論見通りにいかないことにすら期待する、というのが言わば「イメ日流」なのだ。

それは、私たちの努力が常に、議論をスリリングに展開させてくれる可能性を持った人びととのネットワークづくりに向いていたという自信に支えられた期待なのである。

伊藤 遊（いとう・ゆう）
一九七四年生まれ。COEリサーチアシスタント。大阪大学大学院博士後期課程。専攻は民俗学。一九二〇年代に提唱され、アカデミズムには無視されたが、現在ポップカルチャーとして継承されている「考現学（こうげんがく）」という日常生活観察の方法を研究中。主要論文：「自分」の〈日常生活〉を「書く」ということ―「郷土研究」再考あるいは自分史方法論研究序説」、「考現学で民俗学するということ―今和次郎・路上観察学会・野外活動研究会の「〈日常生活〉研究」作法」。趣味は「路上観察」。「野外活動研究会」会員。

「イメージとしての〈日本〉」というテーマで作られる「インスタレーション」。このインスタレーションの方法論については、「若手研究者交流WS」でセッションをたてて、議論した。左のイラストは、その際に、メディア・ラボが作成したDPならぬ"ディスカッション・アニメーション"の一部。

『海域アジア史研究入門』にむけて

蓮田隆志・藤田加代子

この頃《アジアの中の日本》といった言葉をよく耳にする。なんだか国際的で格好良さそうな掛け声だが、よくよくその文脈を追っていくと、《アジア＝日中韓（朝）》であることが多い。勿論、インドは？東南アジアは？などとツッコミを入れれば、「あぁ、そうそう」となるのだけれども、次回もやはり《日中韓の中の日本》で話が始まってしまうことが多いように思う。やはり近年よく耳にする「アジア海域史」あるいは「海から見た日本」などの言葉をめぐってもこの種のコミュニケーションギャップが存在する。では《海域アジア史》とはなんだろう。その内実は漠として定かではない。良く言えば多様だが、要するに《海》という視点を導入することの意味がはっきりしないのだ。口の悪い人なら「フェルナン・ブローデルの物真似」「一周遅れの国民国家相対化論」などと切って捨てるかもしれない。

我々の回答は明快だ。日本が世界に誇る日本史・東洋史研究は、その精緻さと実証性の深みとにおいて他国を圧している。だがその精緻さと深みの故に、個別研究の進化の一方で分野を超えた問題意識や研究成果の共有が困難となり、従来の枠組みで捉えきれない様々な要素を過小評価してきた。前近代にも、現代の多国籍企業にも似て、東アジアの海を跨いで活動する海商達の世界があった。だが従来の視点では彼らを各国史に囲い込み、国家に包摂され得ない海の世界を分断してしまう。これまで等閑視されてきた接触と交流そして対立を孕んだ海の世界にメスを入れ、新たな世界史の沃野を切り開くこと、これが《海》の視点の意味である。

海域アジア史研究会（海域研）（※1）は一九九三年に産声を上げて以来、既に十年以上の活動実績を誇る日本の海域史研究の草分けの一つである。創立以来一貫して大阪大学をベースに活動を積み重ね、関西一円の若手院生・研究者が集う、日本を代表する海域史研究の拠点にまで成長した。現在はグローバルヒストリー・セミナーとともに「世界システムと海域アジア交通」班の活動の中核を担い、二〇〇四年には本COEプログラムの一環として沖縄で国際ワークショップを開催した（※2）。参加者はそれぞれ特定の時代や地域をフィールドとしつつも、むしろそのような枠組みを意識的に相対化してきた。いきおい、討論は異種格闘技戦の様相を濃くし、専門分野のジャーゴンでしか話せない人間は目を白黒させて立ち往生することになる。研究会自体が接触と交流そして対立を孕んだインターフェイスの場なのだ。

几帳面な日本の歴史家はこのような視点や枠組みを《試み》としては評価しても、前面に押し出すことに概して慎重だ。足元も固められていない輩の

勝連城より東シナ海を望む

空中戦の場、とイロモノ視する向きもある。だが海域史は決して一国史を究めた達人の余技でも一国史で通用しない劣等生の避難所でもない。「まずは○国史を修め、ついで周辺の△国史なり地域世界へ」という発想を転換しよう。まず海域史的文脈から見てみる。終わらない近代・国民国家の時代だからこそ、そのような発想の人材が必要とされている。そこから始めたとき、一国史の新たな意義も見えてくる。

このような問題意識の下、COEにおける三年間の活動の総仕上げという意味も含めて、一冊の書籍の出版を計画している。標題の『海域アジア史研究入門』のことだ。本書の第一の目的は海域史に志す若手への手引書の提供だが、そこに留まらず広く他分野研究者にも海域史の意義と概念を知ってもらうという目的もある。各国史・各国対外関係史の延長としての海域史ではなく、直接海を扱わない主題であっても、海域史的な発想・視点によって新たな地平が立ち現れる。それをこそ強調したい。換言すれば海域史的史観と従来の史観とのインターフェイスを目指しているのだ。

本書の特徴は大きく分けて二つある。まず執筆者に第一線で活躍する若手を積極的に起用していること、いま一つは広い地域的視野だ。国史的発想からする《日本》対外関係史研究ではせいぜいが漢字が使える中国・朝鮮半島までしか視野に入らない。《アジアの中の日本》が《アジア＝日中韓》に終わることが多いのはそのためである。海域研は、アジア各国はもちろん、欧米への発信も積極的に行っている。語学の達人揃いでもないのに英語で国際会議を主催したり、英語圏のアジア研究拠点のニューズレターに寄稿したりするのはこのような問題意識からだ（※3）。本書でもアジアと欧米双方の最新動向が盛り込まれるだろう。本書を通じて多くの若手がこの魅力溢れる領域に参戦することを期待している。

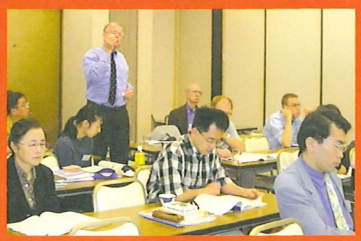
※1　http://homepage2.nifty.com/PHASU/mah-mirror/

※2　国際ワークショップ "Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia"。現在、日本語と英語の両方で論文集を出版準備中。

※3　二〇〇三年に沖縄で開催した創立十周年記念沖縄例会のレポートは国際アジア研究所（在オランダ・レイデン／アムステルダム）のニューズレターに掲載されている（http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/web/grouppage/world/IIAS34ReportUpdated.pdf）。

蓮田隆志（はすだ・たかし）
COE特任研究員。一九七四年、神戸市生まれ。横浜国立大学教育学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専攻は近世ベトナム史。十六～十八世紀ベトナムの政治過程と国家構造とを、世界史的近世の文脈から把握すべく研究を進めている。

藤田加代子（ふじた・かよこ）
COE特任研究員。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（史学）。Leiden University, Research School CNWS of Asian, African and Amerindian Studies（オランダ）およびEuropean University Institute（イタリア）にてEuropean expansion historyの研究に携わる。現在、海域アジアにおける近世グローバリゼーションの動向を経済史の側面から考察中。



沖縄ワークショップ討論風景

沖縄ワークショップの一齣。左より藤田、アンソニー・リードARI所長、桃木教授

研究現場のコミュニケーション

オタクとコミュニケーション

井手口彰典

八〇年代末頃に一般化して以降、オタクという言葉は常に「コミュニケーション不全」のイメージと結びつけられてきた。しかし、ひとたび同人誌即売会の会場やオンライン上のBBS（掲示板）に目を向ければ、そのような先入観とはかけ離れた膨大な量のコミュニケーションがオタクたちの間で取り交わされていることに気付くだろう。「まともに会話のできない奴ら」というステレオタイプは、決して妥当ではない。

だが一方で、彼らが時にコミュニケーション忌諱とも取れる態度を示すのも事実である。ごく乱暴に言って、彼らのコミュニケーション回路はデジタル的、つまりオンかオフかの両極端である場合が多い。趣味を共有できない相手、自分に批判的な姿勢をとる相手に対し、オタクは一方的にコミュニケーションを遮断する傾向にある（ただしオンラインBBS「2ちゃんねる」など匿名の環境下では、批判に対する過剰反応が起きる場合もある）。

そのようなコミュニケーションスタイルに不可欠なのは、不特定多数の中から自分と共感しうる相手を捜し出すための「技（テクネ）」である。筆者はこれまで、それをインターネット通信における〝Ping〟というコマンドに喩えて説明してきた。Pingとは、オンライン上に存在する特定のパソコンが自分と通信可能な状態であるかどうかを識別するための、ごく微少な信号のことである。オタクはこのPingを周囲にまき散らし、レスポンスを返してくれる相手にだけコミュニケーション回路を開く。

仲間は欲しい、しかし批判の矢面に立ちたくはない。Pingはそんなダブルバインドを乗り切るための戦略である。信号はあくまでも相手の反応の有無をチェックするだけのものであり、仮にそれが無視されたとしても、発信者はなんの痛みも伴わない。だがもしも相手が何らかのレスポンスを返してくれるならば、その相手は彼に共感してくれる人物であり、趣味を共有できる仲間である。

今日、Pingは様々な形で顕在化している。コスプレや「2ちゃんねる」特有のスラングなど、明らかにそれと分かるものから、日常会話に織り込まれるアニメのセリフ引用、携帯の着信メロディ、鞄に付けられたピンバッジなど、一定の知識なしには全くそれと気付かないようなものまで実に多彩である。しかし共通しているのは、用いられるPingが彼の趣味世界に直結しているという点だろう。だからこそ、仮に誰かが発するPingに気付いたとしても、それが自分の趣味世界と一致しないのであれば、敢えて目を伏せるのも一種のマナーとなる。倫理的・感情的な是非は別として、それが高度に洗練されたコミュニケーション技術であることは間違いがない。

井手口彰典（いでぐち・あきのり）
一九七八年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程在学中。教育学修士、教育情報化コーディネータ。専門は音楽学／音楽社会学。特に「デジタル」や「コンピュータ」の普及に伴う音楽の意味的・質的変化に注目して研究を進めている。主な業績は「現代的メディアがもたらす「送り手」と「受け手」の関係変化：音系を事例に」（阪大音楽学報、二〇〇五）、「「非一芸人」としてのストリートミュージシャン：「他者」の機能を中心に」（ポピュラー音楽研究、二〇〇四）等。

2ch（ちゃんねる）画面。膨大な話題を扱う巨大匿名掲示板群。
ルールを守れば誰でも自由に書き込みができる。

コミケット（同人誌即売会）会場の様子

ih.Topics

2005年1月1日以降のイベント&業績をご紹介します（2005年9月現在）。
各情報の詳細ならびにその他については、ホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/）をご参照ください。

主なシンポジウム・ワークショップ

1月21・22日	第3回多言語社会研究大会
1月 22日	海域アジア史ワークショップ
2月 13日	人類学の複数化とトランスナショナルな関係
3月 4日	「イメージとしての〈日本〉」国際シンポジウム
3月 24日	Religions, Secularism, and Public Sphere
5月 31日	シンポジウム Transboundary / modern art
6月25日・26日	Globalization in Northeast Asia in the 20th Century.
6月25日・26日	若手研究者交流ワークショップ2005「イメージとしての〈日本〉」
7月 15日	COE公開授業／社会のなかの人文学 「CafeTalk54 鷲田清一＋川俣正」
7月23日・24日	Reading Manga From Multiple Perspectives: Japanese Comics and Globalisation
7月26日～29日	倉敷2005「芸術と福祉」国際会議
8月9日～11日	第3回全国高等学校歴史教育研究会
10月22日	International Workshop on "Criticism to Sinocentrism: From Inside and Outside"
10月29日・30日	ポスト・ユートピア：フィールドからのアプローチ
10月30日・31日	シンポジウム「中東欧の近現代芸術―美術・建築・音楽・演劇」

業績報告書

世界システムと海域アジア交通　2004年度報告書
発行日：2005年2月28日／責任編集：桃木至朗／編集：佐藤貴保

言語の接触と混交―台湾残存日本語の談話データ
発行日：2005年3月1日／責任編集：津田 葵・真田信治

言語の接触と混交―共生を生きる日本社会
発行日：2005年3月1日／責任編集：津田 葵・真田信治

言語の接触と混交―国際シンポジウム〈多言語・多文化社会としての日本の現状と課題〉発行日：2005年3月1日／責任編集：津田 葵

「臨床と対話」研究グループ2004年度報告書　第3回対話シンポジウム報告書
発行日：2005年2月28日／編集：稲葉一人・大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室

日本、もうひとつの顔―大阪大学フォーラム2004（於ストラスブール）報告書
発行日：2005年2月28日　責任編集：金水 敏

定例研究会等

「モダニズムと中東欧の芸術・文化」研究会

1月 24日	ヤロスラウ・スーハン（ワルシャワ現代芸術ギャラリー副館長）
2月 21日	ミロスワフ・バウカ（作家）
3月 7日	デービッド・クラウリー（イギリス王立芸術学院　デザイン史部門）
3月 14日	アンタル・ラクネル（現代美術作家：ハンガリー）
5月 6日	中村 真（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程　音楽学）
5月 20日	永田 靖（大阪大学大学院文学研究科教授　演劇学）
6月 17日	若林一弘（東欧民俗学） 小野真紀（大阪大学大学院文学研究科修士課程　音楽学）
7月 8日	関口時正（東京外国語大学教授）
7月 15日	西 成彦（立命館大学教授）
6月 30日	シュテフィ・リヒター（ライプチヒ大学東アジア研究所主任教授）
7月 1日	宮崎 恒二（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）
7月 8日	ダリウシュ・ズィフォヌン（コンスタンツ大学歴史学・社会学部助教授）
7月 15日	アルベルト・カンブロッシオ（マクギル大学教授）
7月 22日	三尾裕子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授）

トランスナショナリティ研究セミナー（第45回～第60回）

1月 28日	ミリー・クレイトン（ブリティッシュ・コロンビア大学助教授）
2月 18日	グスタボ・リンス・ヒベイロ（ブラジリア大学人類学部準教授）
3月 4日	アユミ・タケナカ（ブリン・モア・カレッジ助教授）
3月 22日	マルティン・リーゼブロット（シカゴ大学社会学部・神学部教授）
4月 22日	時安邦治（学習院女子大学国際文化交流学部助教授）
5月 13日	近藤英俊（関西外国語大学特任助教授）
5月 27日	植村清加（成城大学民俗学研究所研究員）
6月 3日	亀山俊朗（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）
6月 17日	渡辺 靖（慶應義塾大学環境情報学部助教授）
6月 24日	クリス・グレゴリー（オーストラリア国立大学準教授）
6月 27日	宮崎 広和（コーネル大学人類学科助教授）

グローバルヒストリー・セミナー

2月7日・9日・10日	デニス・フリン（パシフィック大学教授）
5月 7日	パトリシア・ハドソン（カーディフ大学歴史学・考古学部教授）

中央アジア学フォーラム

4月2日・7月30日

海域アジア史研究会　（1月～10月例会）

1月 22日	深見純生（桃山学院大学）
2月 25日	李 領（Korea National Open University）
3月 12日	ピヤダー・ションラオーン（大阪大学）
4月 22日	ジョン・ビントリフ（ライデン大学）
5月 28日	藤田明良（天理大学）／須永 敬（岐阜市立女子短大）
6月 24日	山内晋次（大阪大学）／藤田加代子（大阪大学）
7月 23日	大阪歴史博物館特別展見学会
10月 1日	松方冬子（東京大学史料編纂所）
10月21日	太田 淳（ラトガース大学）